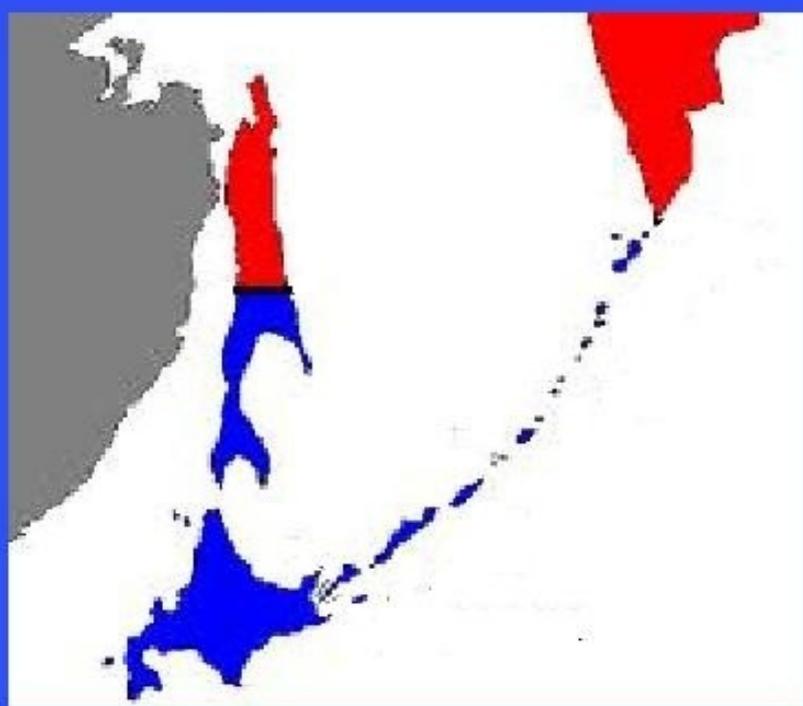


間宮林蔵は
探検家にあらず



岸塚 康子

間宮林蔵はなぜ探検家なのでしょう。私には理解できません。今で言えば徳川政権下における国土交通省の役人です。であれば素直に日本の最果ての北を発見し認められた歴史上の人物です。間宮林蔵を社会科では探検家としています。これが、いけません。私が思い描く探検家とは本人の好奇心を満足させる事が目的であるという条件がありますが、間宮林蔵の旅行費は徳川幕府の金です。これに当てはまりません。探検家といったら個人の問題です。しかし徳川幕府の命を受けての行為であれば、それは国事行為です。探検家とするのは何か意図があるのでしょうか。

間宮は子供の頃から何でも測ってしまう子供でした。例えば川で遊んでいれば川の深さを、小枝を折りって、その小枝を川に突き刺して測って遊んでいました。でも小枝に目盛りがあるわけではありませんので当時の言葉で言えば寸法は測りようがありません。しかし林蔵はこれを繰り返したと番組で言っていました。そんな子供って皆さんの知り合いにいらっしゃるのでしょうか？

今なら簡単に物差しも巻き尺もあります。きっと林蔵少年が今の子であれば光や音波を出して遠くの距離も測れるのですから、距離の世界に更に没頭していたのではないのでしょうか。でも、そんな少年は見たことがありません。

親が教えた訳でも、この時代の教師（当時は師匠というのでしょうか）が教えたわけでもないのにです。私は、その事に驚きました。そして、そのありとあらゆる物を測りたいという気持ち

日本と言う国の北の果てへは、どこにあるのかという思いに駆られていくのですが、それは探検家の思考ではなく幕府の命令によるものでした。これをもって、何故、間宮林蔵の肩書きを探検家としたのか分かりません。

私は探検家を否定している訳ではないのですが、恐らく間宮林蔵も「探検家」と称されることは不本意なのではないかと思っています。

南極物語という映画をご存じでしょうか？

主人公のタロとジロという犬は樺太犬でした。故に樺太とは日本語です。

ところが今は「サハリン」となっています。サハリンは日本語ではありません。サハリンが樺太か樺太がサハリンなのか、その因・縁・果が分かりませんでした。何故なら学校では一切教えてくれませんでしたから。

植村直己さん・スキーの三浦雄一郎さん・ヨットの堀江健一さんや白石康次郎(26歳・世界最年少単独無寄港)さんは迷う事なき探検家ですが、江戸時代後期、日本人未踏の樺太（現在のサハリン）を調査し「間宮海峡」はシーボルトは、間宮林蔵の調査を評価、その著書『日本』においてタタール海峡の最狭部を「Str. Mamia seto 1808（間宮の瀬戸）」と記しています。世界地図でも乗っています。何故、世界は日本の北の果てを間宮海峡としたのか。

それはつまり、樺太までが日本の領土であることを認めた証でした。

樺太はユーラシア大陸の半島ではない独立した島である。そして、その保有国は日本であると認めた瞬間でした。間宮は何としてもロシアとの境界を見見極めなければならないという幕府の命令による調査隊の責任者でした。

ですから、探検家と称するべきではありません。調査隊なのですから。

1811年3月、当時の日本国政府である徳川幕府に間宮は日本の北の境を樺太と報告しています。そうであれば、そのままであれば間宮の勇躍によっての日本の領土は樺太を含む北方領土は 北方四島の合計5,036km²と 樺太36,090.30km²で41,126現在の日本の面積377,835km²（世界60位）に加算されて居たわけです。ですから現在の日本は上記計算を本来と捉えれば10.88%も国土を減らしたことになります。

つまり現在、住んでいる自宅のスペースがある時から11%も減らされれば 末期の代まで語られるはずなのに 間宮の勇躍からの因・縁・果を日本の教育者は放棄していることになります。間宮自身が死を覚悟して、自分の墓まで建てて日本の北の果てまで勇躍してくれたのにです。こんな重要なことを現在の学校は一行たりとも記載していません。この国の教科書はいったい何を伝えたいのかと思います。

今年も又、世界でただ一国それも立て続けに二回も落とされた原爆の日が近くなってきました。多くの国会議員が参列することでしょう。しかし 樺太にも 北方四島の択捉トク・国後クシ・色丹シタ・歯舞ハバマイには一人として有権者がいないことから、真剣にこの問題を論じる政治家が居ないように思います。それにしても、幕府の命令だけで自分の墓を作って、命を賭けて自分の人生を捧げまで成し遂げた日本人の男・間宮林蔵と今の日本の政治家と根本が全く違うように思いました。

幼いときから竹竿を持ち歩き、友達と遊んでいても木の高さや川を深さを測る子供で分からない事が目の前にあると明らかにせずにはいられない性格だった間宮は、その才能を幕府に認められ20歳の時に蝦夷地（現在の北海道）及び周辺の調査を申しつけられました。間宮の仕事ぶりは間宮は勤め元より寒地積雪の時期も厭わず島を廻り測量を続けたとあります。（幕府の記録より）

1807年、幕府の役所があった択捉島にロシア軍艦がアイヌの人々や役人の住む村々を攻撃を仕掛けました。ロシアとの貿易を拒んでいた事への報復でした。幕府の役人は人数では勝るものの実戦経験が乏しく、恐れを成して、たちまち逃げ出してしまいました。その中であって、只一人、持ち場を死守して戦おうとする男が幕府役人の間宮林蔵 28歳でした。この時、ロシアの脅威を目の当たりにしたわけです。

一緒に逃げようという仲間に「ひとたび預かった役所から引き下がることなど出来ようか」と言ったとされています。しかし一人では無理だと諭され、間宮はやむを得ず択捉をさります。ロシアの攻撃は幕府に大きな衝撃を与えました。蝦夷地の守りを固めるため、2ヶ月後には函館に3000人の兵士を派遣、そのうち国後クナシリに380人を派遣しました。

しかし万全には程遠い守りでした。何故なら宗谷岬の北にある樺太について幕府は何らも知り得ていなかったのです。当時の地図では樺太はユーラシア大陸に連なる半島として描かれていました。（想像図だったのでしょう）幕府はロシアが本格的に進出して

くる前に境界線を定める必要性がありました。

「樺太は半島なのか、島なのか」「樺太の全部の海岸線とロシアとの境を調査せよ」間宮林蔵に白羽の矢がたちました。間宮は幕府の命令により北海道に

向かう途中、故郷の日立により間宮林蔵墓を建てます。いつ死ぬか分からない旅。『成功の形たためうちは誓って帰るまじ。もし難行のせつは吾一任達とも蝦夷地にのこり蝦夷の土となるであろう 「山崎半蔵日記より」』

つまり死を覚悟して間宮林蔵は測量に向かったのです。

1808年、樺太南端に上陸。現地のアイヌ人は誰一人として樺太の事を知りませんでした。そこで間宮と同僚の松田は東西二手に分かれて海岸線を調べていくことにします。間宮は東回りで北上。徒歩で 或いは丸木船を駆使して丹念に記録していきます。間宮の日誌には東海岸にトッショカウッシリと称する山がある。麓より山頂に至るまで岩石累々として登るべからず。名山奇峰と称すべし

獣は蝦夷島（北海道）にも無き種ありトナカイと称し全体はシカで顔は馬に似て 角は枝多し⇒「北夷分界余話」と当時の様子を事細かに詳細に記録していったのでした。

間宮が記録したスメレンクルと称する人々の風俗とその画について「スメレンクルの人々、子を育てるにいたって子にかせをし、板を屋根よりかける。しかれども飄々（ひょうひょう）として快いのか、泣くことなし。乳を含ませる時はこれを抱きて含ませしむ」

と『北夷分界余話』に書かれています。「スメレンクル」はサハリン在住のロシア系一民族の、アイヌの人々による呼称です。

自らはニブフと称しており、現在一般的にはこの名称を用いていますが、今回は原史料に準じ「スメレンクル」の名で紹介いたしました。

樺太の再探検を願い出た間宮の言葉について「樺太と大陸の境をしかと見きわめずに帰りしは心残り多く、これよりすぐさま引き戻り見きわめ申したし」これは江戸時代末期の旗本で日露和親条約に日本側全権として参加した川路聖謨（かわじ・としあきら）の著書『敬斎叢書』の中で紹介されている間宮の言葉によりました。

探検の続行を決意する間宮の言葉について「志をむなしくしていただずらに帰り去ることの口惜しければ、いかにもして奥地に至るべし」と言っています。

1808年、6/20。間宮は樺太を二手に分かれて探索していた仲間と合流し、そこで樺太が半島でなく島と判明しました。仲間曰く「西海岸のラッカというところで、狭い海が北まで続く光景をみた」これにより樺太が島である。大陸と繋がっていないと判断したのでした。そして樺太が日本と異国の堺であると見定めました。しかし間宮は、もっと近くまで行き、異国との境を見極める必要があると考えました。

間宮はラッカというところまで行き、更にその先まで進もうとしました。ところが悪路で進めなくなり、海は浅瀬で船が通らない。「樺太の全貌を明らかにせぬ儘、引き下がるわけにはいかない」と間宮は考えます。しかし樺太が島である可能性が高いことを一刻も早く幕府に知らせなければ。

間宮は一端戻る事にします。そして幕府に報告書を出すや否や「樺太と大陸の境をしかと見極めぬずに歸りしは心残り多く、これより直ぐさま引き戻り見極め申したし」（敬齋書より）と言いました。

その時、樺太はあと三月もすれば極寒の季節。「今すぐ出発しても無理」と言われるものの間宮は再び樺太に戻りました。9月を過ぎ冬が始まりました。北上しようとするも厳しい環境に遮られ南に引き返すことにすると極寒の地を行き来している内に間宮の指は変形。「志を空しくして悪戯に歸り去ることの口惜しければ如何にしても奥地に至るべし」（報告書 東地方紀行より）と言っています。

出発から10ヶ月、間宮は前回の最北端、ラッカにやってきました。そこから前回は眺めるだけだった海を現地の人々の船を借りて渡る事にします。1809年5月。狭い海を登り切った間宮は「このところ極北の地にして家わずかに五つ六つ。北は海が緩やかに開けり」自分が北上してきた海が海峡であった事を確認します。これが間宮海峡です。これにより自分の目で樺太は大陸と繋がっていない。島であることを確認しました。

1809年5月、現地のスメレンクルの長が気になることを話します。「ロシアの国境は、この島から遠からず。露西亞領の民らは時々、船に乗じ鉄砲を持ちて、近くの海に獵をすること少なからず」そして「デレンという地に、どこかの国の役所がある」という話を聞きました。

ロシアは大陸の何処まで、きているのか？もしや、デレンの役所とはロシアのものではないか。間宮はデレンに連れて行ってほしいと頼むも「林蔵が容貌の異なるをもって、人々それを怪しみて必ず林蔵を黜り、その苦しみに絶えずして死に至るべし」と言われてしまいます。

間宮は「幕府の命なくして異境の地に入るは、禁令に触れる恐れ在りと言えども、ロシアの様子を奥深く探り尽くさずして帰るも調査を命じられし甲斐もあるまじ」と考えます。間宮の固い意志に遂にスメレンクルの人々も首を縦に振りました。

間宮はスメレンクルの人に、これまで書きためた全ての記録を託します。「我 万一、彼の地にて死亡のこともはかり難し。その

時は、これを持ち帰りて幕府の役所に捧ぐべし」
命を賭して間宮林蔵は大陸へと渡しました。

間宮は大陸に渡りサントン人の集落に着きました。すると顔が違うため村人数十人に家に連れ込まれてしまいます。間宮は事情を話すのですが言葉が通じません。村人は間宮の手足をさすったりしていましたが、そのうち頭を殴りだしました。間宮は村人達が歓迎の礼儀なのか持ち物を奪うのか分からないまま、樺太から同行した案内人に助けられました。

間宮は彼から村人達が間宮を殺すつもりだった事を教えられます。既に全く意思疎通の取れないところに来ていた事に改めて気づくのでした。

7/11 デレンに到着。そこには様々な民族が数百人いました。アムール川の沿岸の各地から物を交換する為の市場が開かれていたのです。間宮は役所を訪ねます。果たして役人は、中国・清の者でした。

間宮は役人と筆談します。「われ、この地にきたりしは、ロシアが我が地に来たりて仇をなすため、このあたりの土地も既にロシアにうばいとられしにやと氣遣いきたりし」役人は答えます。「ロシアを日本にも仇を致しに参るや。我が国ロシアの少々の侵略は、そのままにしてとりあわず侵略やまざるにおよびて厳しく懲らしめけり。ロシアの堺は遠い北」それにしたいして間宮が「安堵いたし候」と返しました。

間宮は遂にロシアの勢力が、まだ大陸に及んでいない事を掴んだのでした。

1809年、間宮は1年半に及ぶ探検を終え、報告書を作り始めます。地形や自然・産物・人々の暮らし民族同士の関係などに探検と同じ1年半を費やして膨大な量の北方探検の報告書を作成しました。

1811年3月、報告書を提出。全13巻に及ぶ記録でした。樺太とアムール川周辺の詳細な地図には訪れた土地の名が全て書かれています。各地の人々の様子を分かりやすく書いた絵ものっています。

「清国とロシアの間に種類の民族が互いに争っている。ロシアが優勢ではない」間宮の執念が詰まった報告書。これにより漸く幕府は樺太と北方の状況が把握できました。

一番の功績は間宮海峡の存在を確認したことです。世界地図に唯一日本人の名前が出ている。つまり、ロシアの勢力が樺太を全部とると言ったとき、それは違うといえる。ロシア南下を防ぐ布石を打ったのです。

間宮はその後、日本各地を廻り日本の調査・測量に邁進しました。とくに蝦夷は10年に亘って滞在し、やり残した地域の調査をしました。晩年も出世を望まず職務を果たし、着物は一枚だけ部屋には地図や地球儀が並んでいました。

北方探検から35年後の1844年に江戸で亡くなる享年65。茨城県の子孫の元には貴重な品が保管されています。この硯は大陸の石で作られました。間宮は調査記録が外国に漏れないように全て焼き捨てましたが、硯だけは北方探検の証として遺しました。

宗谷岬に佇む間宮の象。その眼差しは遙か樺太をのぞいています。

「その孤立して一意を行うや 堪えて官長に媚びずと またおのずから一奇士なり」と友人に評されています。